

看護業務の効率化

試行支援(コンサルテーション)事業

医療法人

藤田病院

選択した取組(2019年度受賞)

看護記録に要する時間削減の効率化への取り組み

－ 記録内容の標準化とリアルタイム記録に焦点を当てて－

〈 次年度実施にむけた準備のための支援を希望 〉

支援施設 県立広島病院

試行期間 2020/9/1～2021/1/31

プレゼン動画視聴はこちら ▶



急性期から介護まで、地域の安心を守ります



医療法人 藤田病院

所在地 岡山県岡山市

従業員数 142名 うち看護職員数：65名(2020年12月1日現在)

病床数 99床 (急性期55床、回復期リハビリテーション44床)

入院基本料看護配置 地域一般入院基本料 1

回復期リハビリテーション病棟入院料 3

現状と課題

- 日勤の時間外勤務時間の多さが長年の課題であり、2019年9月に電子カルテを導入後、特に増加傾向にあった。
- 17時以降の記録業務が多く、時間外勤務時間の原因として「看護記録」の後回し、勤務交代間際の「医師からの指示受け」等が考えられた。
- 今までも時間外勤務を削減するための業務改善を各種行ってきたが、決定的な解決に至っていない状況であった。
- 記録業務をリアルタイムで行い、勤務時間外の業務の整理と削減を進めたい。

目標

■ 試行期間における目標

リアルタイム記録の実施にむけた基盤整備を行う

■ 施設の最終目標

時間外勤務時間の低減により心身ともに健全な生活が送れるような職場環境に改善する

試行計画

2019年
9月 **電子カルテ導入**

- スタッフからの強い要望もあり、業務改善としても有効なことから電子カルテを導入。

2020年
10月 **パソコンの増台**

- リアルタイム記録導入に関して病院経営陣らに説明し、許諾を得る。
- 病棟主任に対して、リアルタイム記録導入の説明。
- 病棟看護師がリアルタイム記録時に、専用で使えるパソコンを増台。(病棟で8台稼働可能)

試行
支援
事業

11月 **業務改善の取組を同時に実施**

- 理事長の進言により、ユニフォーム2色制を導入。日勤の時間外業務状況が可視化される。
- 円滑な業務遂行にむけて、病棟内の物品整理等の業務改善活動を実施。

2021年
1月 **取組の基盤構築にむけた準備・調整**

- 記録業務が何時になされているのかを電子カルテ上で調査すべく、システム担当者との調整を始める。
- 業務改善に前向きな病棟スタッフを交えて、支援施設とのweb会議を行い、今後の取組の進め方について調整を実施。

■ 病棟における記録業務・時間外勤務時間の現状

- これまでも、時間外勤務の削減に関する様々な業務改善を行ったものの、明確な結果が現れていないことなどから、現場の看護師の中には残業がなくなるのは「仕方のないこと」「どうしようもない」という半ばあきらめの気持ちが見える。
- 時間外勤務の原因は「患者数の多さ」であると捉えている看護師が多いが、実際には同規模病院と比べても患者数は多くなく、業務改善で時間外勤務を減少させるという前向きな気持ちで取り組むことが目標である。

Point!

上記を踏まえ、支援施設と検討した取組の方向性

- ①業務量調査により時間外勤務時間の実態を可視化することで、現状分析・目標の明確化を図る。
- ②病棟内に取組のキーパーソンとなるスタッフをつくり、病棟内の目標の統一、スタッフの自発的な活動としての取組の推進を目指す。

■ 業務量調査の実施による時間外勤務時間の要因の可視化

- 電子カルテ担当者が試行施設とのweb会議に参加し、具体的なデータ抽出方法等について打ち合わせを実施
- 業務量調査の具体的な内容について支援施設より助言
 - 当院ではこれまで細かな業務量調査を実施したことがなかったため、現場の負担も考慮し、「直接業務」「間接ケア」「看護記録」「診療の補助業務」の4点に焦点化し実態を把握することから検討する。

Point!

効果的だった支援施設からの助言

- ✓ 時間外勤務の要因として記録だけに着目せず、簡易的でも業務量調査を行い、要因の特定を行う必要がある。支援施設でも、業務量調査の結果、想定していた内容と異なる業務が時間外勤務の要因であったことが明らかとなり、具体的に何をすべきかが明確になった。

■ 病棟スタッフへの働きかけ・取組の土壌づくり

- 業務改善に前向きな病棟看護師へ、支援施設とのweb会議参加を依頼。
- 支援施設より助言を受け、病棟のキーパーソンがスタッフの現在の業務に関する思いを把握する機会をもつことを検討する。
 - 取組のキーパーソンが各スタッフと15分程度ずつ（改まった形式でなくて良いので）聞き取りを行い、スタッフ個々の思いを把握すると同時に、業務改善に対する視点を少し変える機会とすることが目標。
 - スタッフ個々の思いを把握したうえで、病棟内で、どのような業務改善が実施できるかを話し合えることが目標。

Point!

効果的だった支援施設からの助言

- ✓ 取組開始に向けた土壌づくりとして、「2021年の夏ごろには〇時に帰宅できる習慣をつくりたい」など、スタッフ間の思い・目標を話し合う機会を設けることや、それらを共有できることが取組の第一歩として必要なステップである
- ✓ 改善に前向きなスタッフを業務改善のチームに加え、現場のやる気の向上と、トップダウンではない取組となるよう工夫が必要。

■ 目標に対する評価

- 今年度は、次年度実施にむけた準備段階であり、看護業務の効率化に関する成果までは得られなかったが、1月末に1名のスタッフが支援施設とのWEB会議に参加し、支援病院の方と直接話ができ、モチベーションの向上につながった。
- 次年度以降の取組に向けて、着手すべき点が明らかになった。



- リアルタイム記録の取組に前向きな看護師のいる病棟のチームをモデルとし、成功事例を作り上げて全病棟に広げたい。

